



田
地
文
子
全
集

第
二
卷

新 潮 社

第五回配本(全十六卷)

円地文子全集 第二卷

定価三三〇〇円

昭和五十三年一月十五日 印刷
昭和五十三年一月二十日 発行

著者 円地文子 © Fumiko Enchi, Printed in Japan 1978.

発行者 佐藤亮一

発行所 株式会社新潮社

郵便番号 一六二 東京都新宿区矢来町七一

業務部 東京(〇三)二六六一五一

電話 編集部 東京(〇三)二六六一五四一一

振替 東京四一八〇八番

印刷所 東洋印刷株式会社

製本所 神田加藤製本株式会社

乱丁・落丁本は、御面倒ですが小社通信係宛御送付下さい。
送料小社負担にてお取替えいたします。

円地文子全集 第二卷 目次

紙魚のゆめ
雀
ひもじい月日
浜木綿
吉原の話
あの家
愛妾二代
銀杏屋敷の猫
光明皇后の絵
レコード
廃園

127 115 100 89 74 63 51 39 24 20 7

男
の
ほ
ね

虚
空
の
赤
ん
ぼ

写
真
の
女

く
ろ
い
神

恩
給
妻

殺
す

か
の
子
変
相

松
風
ば
かり

水
草
色
の
壁

妾
腹

黝
い
紫
陽
花

278 265 254 238 225 212 201 190 178 164 143

妖	家	琴	二世	妻	酉	耳
	の	爪	の	の	の	瓔
	い	の	縁	書	市	珞
	の	箱	拾	き		
	ち		遺	お		
				き		

381	365	357	343	329	317	303	287
-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----

円地文子全集 第二卷

廃園

その日江馬周二はA新聞社の講堂で能を観ていた。去年戦災にあって疎開して以来、殆ど一年ぶりで東京へ帰って来た彼には、舞台の上で演じられる演技そのものがまず珍しく、囃子の笛が一声高くうねり上る音を吹きたてた最初の瞬間、突然何とも言えぬ情感がどっとこみ上げて来て臉の熱くなるのを覚えた。何度となく観ている「熊野」の曲が今日ほど新鮮に美しく感じられたことはない。彼は老いた髪ものの名手が踏む静かに冴えた足拍子の一つにも、その手にかざされた舞扇の紅の色にもそこに抽象された芸術の裏に生々しい女人の姿を見出した。どういう髪とも顔かたちともおぼろげながら、六百年も七百年も昔に生きていた若い女の小さい吐息ややわらかい肌の匂いが殆どすぐ傍に坐っているかのようにまさまじ感じられるのである。象徴美の粹に触れた喜びで、彼は久しぶりに故郷へ帰り旧知にめぐりあったような気持で廊下に出た。

「江馬先生——やっぱりそうでしたわ」

その声をかけられてふりかえると、そこに笹川幹子が小さい眼を細めて笑っていた。

「やあ、これは」

と、江馬は丁寧に頭を下げた。

「いつ出ていらっしやいましたの？」

「つい二週間ほど前、やっと自分の貸家をあけて貰って入りました。あなたのところはお残りになってよかったですね」

「ええ、でも東中野が焼けましたから。父の方のものは大抵いなくなりましたわ」

「惜しいですわねえ」

と江馬は感情をこめて言った。東中野というのは彼の昔師事した戸叶博士の家で、大学を出たところ、幹子とその姉の美子に仏蘭西語を教えに行った思い出のある邸である。

「偶然だったのですがね、あの空襲の三週間ばかり前に僕

はあのおうちへよって美子さんにおあいしたのですよ。今になると、先生のお宅にお別れをしに行ったようなものですがね」

「あら、そうですか、姉はちっともそんな話をしませんので存じませんでした」

「美子さんその後どうしていられますか？」

「ええ、ずっと私のうちに……」

と言いながら幹子は小さい顔をあちこち動かして、

「今そこらにいたのですけれど……」

……」

と江馬も煙草をくわえたなりぐるぐるの廊下を見まわした。幹子はその間に出入口から座席をのぞきこんで、

「ああ、もうちゃんと席へかえって坐っていますわ。呼びましょうか」

「いいえ、それには及びませんよ」

江馬は美子の坐っている座席へ眼をやった。割に近いところに坐っているのが見えた。美子は居丈の高背を椅子にもたせて、首を少しあおむけ空の舞台を凝と見ていた。

多すぎる髪の毛がいつものように重そうに頭のうしろに束ねられていた。

「美子さん相変らずですか」

「ええまあ……」

と曖昧に答えたものの、幹子は少し考える風に眼をそばめた後、

「いいところでお眼にかかったわ。先生この後の狂言御覧になる？」

「いいえ、どうでもいいですよ」

「じゃ人のすいたところで休憩室へまいりましょうよ。私、姉のことでほんとうに苦勞しますの。どうって解決の出る問題ではないんですけど、お話しても解って頂けるのは考えてみると先生ぐらいなものですよ」

「私も美子さんのことは時々気になってたまらない時があるんですよ。焼ける前東中野へ行ったのも、あの辺まで行ったら、ふっと美子さんのことが気になり出して、ついふらふらとね」

「よく私におあいになりませんでしたこと。私あの時分三日に上げずあそこへ出かけて父の本だの草稿なんか疎開してましたの。姉に委せて置いたら、あの通りの気質ですから何一つ動かせはしません」

いつか二人は休憩室の椅子に對いあっていた。合の狂言が始まったので廊下を通る人影もまばらだった。

江馬は「熊野」で醸された快い昂奮をむざんに破壊するような寒々しい話を幹子がはじめてくれねばよいと思った。幹子の聡明な性格を信じていながら、家財を焼失した無力な姉を引きとっている彼女の家の経済状態などと考えると、

このごろの都会に住むものの常識になっている愚痴や不満が幹子の口から出ないとは保証出来なかつた。しかし幸い幹子はそういう愚痴や不満とは別の不安を姉について物語つた。

「姉は狂人ではありません」

幹子は緊張して少し頬の肉をふるわせながらいうのだった。

「でもだんだん世の中が姉を狂人にしてしまひそうで、私おそろしくてたまりません。今姉のことを極く上べだけでも理解しているのは私だけです。私の夫だって子供だつてもう決して姉を理解しようとはしません。そのことは今一緒に家に住むようになって見てはじめて解りました。姉があれ程外から苛められながら独住みを固執していたのは尤もです。あの人はエトランジェなのです」

そう語る時幹子は小さい眼にうすく涙を浮べていた。彼女達を少女時代から知っている江馬は幹子の言葉を一々うらづけるように深くうなづくことが出来るのであつた。

美子と幹子姉妹の父は著名な物理学者であつた。父ばかりではなく彼女らの叔父も二人まで哲学者、言語学者として斯界の碩学であつた。美子達の父親——戸叶博士は専攻の外に文学や美術を愛し、優れた文芸評論家として尊敬されていた。

こういう環境に二人の姉妹は成長した。彼女達は幼いころから父の広汎な知識と審美的な感覚がゆるす限りの教養を与えられ、明治の末年頃の一般に清楚な——時に寒々しく見えぬこともない——文化面の最高の雰囲気を呼吸して育つて行つた。ピアノを習うにも語学を学ぶにも博士は嚴格に師を選んだ。江馬がその頃、東中野へ仏蘭西語を教えるにゆくという時、江馬の友人はそのことで江馬の語学の実力を認めた。戸叶博士は語学を駆使することも天才的な頭脳を持つていた。

そのとこころ両親の寵を一身にあつめて小さい女王のようであつたのは姉の美子であつた。十四、五歳になつていた美子は眼鼻立ちのぱらりとした大柄な少女で、妹の幹子の小作りな眼の細い丸顔は姉の傍に置くと輪の大きい花の傍に野草を並べたようにひきたたなかつた。その為でもなかつたろうが、美子はいつもオリヅ色のカシミヤの洋服を着、きゅつと腰を緊めたスカートの下から白い靴下の長い足をのぞかせているのに、幹子はきままつてメリンスか銘仙の和服を着ていた。それは一層姉を貴族的に上品に印象させ妹を小婢のように可憐に見せた。語学は二人ともこの家の娘らしくよく出来たが、妹は努力家で、姉は天稟の才を蔵しているように見え、年齢の差違ばかりでなく江馬は美子を教える時には頭のない競争相手と對いあう時のように緊張した。高踏派の詩など諷す時は殊に楽しかつた。自分

でももてあぐむような難かしい原語を美子はすらすらと実に微妙なニュアンスをもった言葉に訳すことがあった。美子は小さい時から父に漢籍を学んでい、その豊富な語彙が敏い感覚に導き出されて来るのだった。

美子は文学を鑑賞するにも哲学的に解釈することが多く、時々江馬は少女に対していることを忘れて、芸術の本質論を説き初めるのだった。

「あなたのように抽象的に文学を見てはいけません。もっと具象的に……そうでないとゆきづまりますよ」

江馬は美子の詩や歌を見せて貰ったりする時もその早熟な才華に驚かされながら、そう助言することを忘れなかった。この姉娘がどんなめざましい女性に成長するか江馬は空想するだけでも充分幸福であった。年齢も大分違い、美子の内気な性質の為もあって恋愛の対象として考えたことは一度もなかったけれど、サッポードとかジョルジュ・サンドとか、持統天皇だとか紫式部だとか高い教養を軟かい皮膚の下に貯えた豊饒な女性の群れを思う時、江馬はいつもオリウ色の洋服を着た足の長い少女をその花園の隅に置かずにはいられなかった。父も母も半ばそういう平凡でない女性を頭に描いて美子を育てていたようである。
夥しい花びらを堅く封じこめた蕾のように見えたそのころの美子を思い浮べると、江馬はその後の美子の余りな姿りように暗然とせずにはいられない。

勤め先が関西へ移ったり、その大学からヨーロッパへ留学したりして江馬が戸叶家と疎縁になっている間に、博士は世を去り美子は間もなく縁づいたという便りをきいた。夫はある財閥の次男で美学を専攻した頭のよい青年だという。江馬は伉儷を祝して任地から贈物を手紙に添えて送った。その後彼がフランスに留学してリヨンにいる時、所用があつてパリの大使館にゆくと、そこにいる友人が美子の夫妻があつて二、三日前パリを立って行った消息を伝えた。江馬は人妻になつて花咲いた美子の姿を心に描いて、
「才媛だろう」

とうら問うて見たが、相手は興の乗らぬ顔をして、
「おそろしい陰気な婦人だね。あわない夫婦のように見えたなあ」

といて、その夫の方へ同情する口ぶりを見せた。江馬は美子が陰気に見えたときいた時、前からあやぶんでいた美子の結婚生活が不幸であることをたしかめ、陽のかげりように感じた。ああいう素質は人妻としては身を全うしないかもしれぬと彼は思った。案の定、三年程して関西の任地に帰りついて間もなく美子が二人の子を残して婚家を去ったという噂をきいた。それから又しばらくして戸叶博士の未亡人が亡くなり美子は九州の方の病院長の妻になつて行ったときいたが、二年ほどすると、ここにも又一人の子を残して離婚し、東中野の旧宅に帰っているという。江馬

は最初の時はさほどに思わなかったが、二度まで夫を愛え子を生みながら、別れてしまふ美子に男性として本能的に嫌悪を感じないではいられなかった。猫か犬ではあるまいし——と彼はその時、たしかに口の中でつぶやき、そういう動物の雌に対するような猥(みだら)がましさを美子にまつわらざることが二重に江馬を不快にした。江馬は少女のころの鋭い直覚力と叡知を孕んで真昼のように輝いていた美子を何か女人の偶像として一段高い台の上に乗せて置きたかつたのである。年を隔てるに従って江馬は未成熟な美子が自分の釈いてきかせる文章の意味を底の底まで追い求め、それははっきり自分のものにした時満足してにっと頷をひいて笑う匂いの多い笑顔が怖ろしいほど美しく感じられてならぬのである。笑うことの齢ないだけにその笑顔は印象に強く残っている。

美子は何故自分の裡に蔵しているものを文字に表現しようとしなかったのであろう。彼女の天分が家政や育児にはなく、哲学とか宗教、乃至芸術の分野にあることは少女のころから略々見当がついていた筈である。彼女自身もその後そういう傾向をますますつらせて読書三昧に日を送っていると聞くにつけて、江馬はその裡に貯蔵された蘊蓄を彼女らしい創意で外へ抛出する日を待ちたいと思つた。彼は真摯な気持ちでそういう意味を認めた手紙を美子に送つたことがある。その返事を美子はいつものようにぎごちないほど堅

苦しい文章で書きつづつて来た。先生のすずめて下さるような才能は私にはないが、妹がそれを果してくれているから自分は満足しているという意味が短く認められていた。

なるほど幹子は遠くから眺めていても姉とは反対に年齢とともにすくすくと暢び育つた感じがする。彼女は父の教え子の一人と結婚し二人の子供をもうけた上、フランス文学の紹介や気のきいたエッセイを発表する上品な女流作家になつていた。折々昔なじみの江馬に翻訳のまぎらわしい廉々など問いあわせて来る手紙なども、昔のどこかいじけた文章のおもかげはなく清楚な才気に溢れていた。しかし何といつても幹子は亜流だ、泉のように深く新鮮に湧き湧き出てやまぬ源流の魅力は美子にあることを江馬は一度も疑つたことがなかった。

数年の後江馬は勤めている学校が變つて東京へ移り住むようになった。フランス文学の会合などで幹子にあうことは度々あったが、美子のいる東中野の家を訪ねる暇はなかなかなかった。戸叶家に入りしていた友人や戸叶の家の直接の親戚などからも美子の噂はよく耳に入つて来たが、そのどれもが美子に対して冷淡な、あるいは悪意に満ちたものに思われた。あるものは美子は最初の夫に悪疾をうつて白痴に近い状態なのだといひ、あるものは吉田御殿のような放埒な行状があると言う。江馬にはどの噂も信じることが出来なかった。

一度、不思議な場所で美子を見かけたことがあった。江馬はある冬の晩友人を訪問して留守だった帰り、雨に降りこめられて場末の寄席に入った。舞台では下手な万才が下品なくすぐりで見物を笑わせたり、器量の悪い娘達が剣舞のようなあらい手ぶりで端歌はなうたの地にあわせて踊ったりしていた。

中入りをすぎたころ、さして込んでもいない場内に眼を遊ばせていると、今這入って来たのである。背後の方の出入口のそばに棒立ちして坐る場所を思案している女の姿が眼に入った。何やら派手なお召の縞ものを着て、髪を重そうに束ね、うすい隈の浮いて一そう大きく見える二皮目を滲んだように見開いている顔はたしかに美子である。江馬は思わず声を上げるまでに驚いた。

美子はたった一人でのろろ席を探し、やがて端の方の座布団に坐って、今語り始めたばかりの若い琵琶師の顔へまじろぎもせず眼を向けている。江馬は美子がひとりなのにはっとしたものの、どういうわけでさむい冬の夜の今時分、こんな場末の寄席へ良家の令嬢が入って来なければならぬのか解釈することが出来なかつた。美子はその周囲に群れてこの娯楽の雰囲気をつたはしている市井の男女とは混りようのないほど不調和だった。いやそればかりではなく、殆ど十年以上も彼女を見ていない江馬には美子の容貌と内部との全く離反している不調和が蔽いようなく露出

してはいたまじかつた。容貌はさして衰えてもいないのに、殆ど年齢のわからぬほど美子は艶のない女に変わっていた。派手な着物の柄がどうにもうつらぬほど彼女は異様にぎこちなく見えた。顔、首、肩、どこと言いがたいなりに女らしい柔軟さが失われ、極端にいうと骸骨が女の衣裳をつけて坐っているように見えた。江馬は一眼で彼女の結婚のうまく行かなかつたわけがわかるように思い、何とも言えぬ消失のおもいを味わつた。

その晩江馬はどうとう美子に声をかけずにその寄席を出てしまつた。しかし長い間自分の中で勝手に想像していたよりも、その一夜の印象で美子の生活は少しづつ解るようになると思われた。

その後も幹子にあう度に江馬は美子の安否を尋ねた。利口な幹子をはじめの中は姉はこのごろ仏教哲学に凝つて大乘起信論を読み通したようだとか、クロイツェル・ソナタを弾けるようになったとか、白い猫を飼つて楽しんでるとかそんな外面的なことしか話さなかつたが、後には江馬がほんの少ししかない美子の同情者であることが解つて来たど見え、美子の不幸な生活状態についてもぼつぼつ話してくるようになった。それによつて江馬は幹子がどんなに深く姉を愛し尊んでゐるかを知ることが出来るようになったのである。

美子は実生活に必要な模倣といふことの少しも出来ない

性格だった。髪の結い方でも着物の着方でも美子は他人が
ついでに指図すればおとなしくその通りになっている。

けれども自分でするとなれば、あんな無造作な束ね髪をとり上げるのに半日以上もかかるし、着物を着かえるにも一、二時間はかかる——おしゃれだとか綺麗好きとかいいうのは違つて、自分でもその不器用さに困じ果てながら、そうするより外ないのである。最初の夫は可成り女の種類もわきまえた男でそうした美子を一種の文化的な裝飾品に仕立てようと考えたらしかった。身のまわりの世話する女など幾人も置いて、彼女が自分の才能を自由に暢ばせるように仕組んでやったらしいが、何年たつても美子は陰気くさく閉じこもつて本をよんでいるばかりで、いくらすすめてみても一向創作活動など始めそうもない。いつか夫の方が根負けして別ればなしになつたのだという。

「あれは石で出来たような女で、他からの愛情などうけ入れる質ではありません」

別れる時最初の夫は幹子の夫にそう述べたそうである。美子の本質を愛してくれる力はなかつたが、悪い人では決してなかつたと幹子はいつた。二度目の結婚は極く平凡な結婚で親類がよつて無理に美子を片づけたようなものだった。それゆえ帰るようになってからも幹子は半分当然の結果のように思われたが、ただ姉がどういふつもりで一度ならず二度までそう容易く子供を置いて出てしまふのか、幹子に

は判断し兼ねた。

ある時幹子は姉に尋ねてみた。

「お姉さま、あなた子供が可愛いとお思ひにならない」

恰度その時美子は縁側に腰かけ、背後に手をつけて夕方の青く澄んだ空を眺めていたが、幹子の言葉をきくと大きくうるんだ瞳をむけて凝と妹を見ながら、

「可愛いわ。でも私にはどうしようもないのですもの……この空が美しいと思つてもどうしようもないと同じように……」

その時美子の眼には珍しく涙が溢れそうになっていた。

「あなた方は仕合せです。可愛いと思えば愛す方法を知つている。くるしいこと、耐えがたいことを口にしたし書いたりすることが出来る……」

幹子はその時ほどただこれだけの言葉を姉に言わたのが深く悔いられたことはなかつた。幹子は姉の創造力についても理解力についても知りすぎるほど知つている。姉がもし男であつたら、何一つ表現しないでも少なくとももう幾人かの人がこのような人間を理解し尊重するであろう。女の世界の住みにくい狭くるしさを幹子は姉の上に自分の何ばいも感じた。

美子は父の印税や多少の遺産を持つていたので、東中野の旧宅に帰らしつて居るのに事欠くほどではなかつたが、実生活に根を降ろした強さの微塵もない若い女主人の生活

は妙に間近く住んでいる人々の好奇心や反感を挑撥すると見え、美子に対するよくない噂は始終使っている女中だの、出入りのものの口を通して世間へひろがってゆくのだった。(実際には彼らは美子の身のまわりから殆ど剝ぎとるようにしてさまざまのものを掠め取ったりしている癖に……) 美子が待合に男と一緒に入るのを見たとか、ある役者に入れあげて着物を皆とられたとか、江馬の耳に入ったのと大同小異な噂が親類の耳へ届き、その度に、美子は体面を重んじる叔父や叔母の叱責を受けなければならなかった。そんな場合でも、美子は幹子が見ている歯がゆいほど言いわけというものをせず、黙りとおしていた。後で幹子に愚痴をこぼすでもなかった。唯監督の意味で親戚へ引取るといふような意見にだけは頑強に首を振った。どんなに冷たく、底意地悪い環境であろうとも、美子にはひとりの生活が必要であった。美子は仏教哲学に専念したり、カトリシズムを通してキリスト教の本質を頭めようとしたり幾度も宗教の門を潜ろうとしながら遂に懷疑主義者である自分をどうすることも出来なかった。美子は幾度か自分のうちに湧き上り、溢れ流れようとする情念を紙に写そうと努めた。しかしそれはどうしても少女のころのように素直に流露して行かなかつた。言葉に組み込まれた瞬間彼女はもう自分のうちなるものは何か目に見えぬ邪魔の手でその精神をぬきとられ、空な形骸だけが紙の上に残されているのを知つ

た。思索を忠実に表現しようとするほどその傾向は烈しくなつてゆき、美子はいかに書くことは勿論、語ることもさえ自分を偽るように思われ出して来た。言語の自由を信じなくなつた人間——いやそれはもう半ば人間ではないかもしれない——その不幸についても幸福についても他人のあずからぬのは当然なことであろう。

美子に残されている喜びはよい芸術品に接すること、自然の中に自分を置くこととであつた。彼女は音楽でも美術でも劇でも時も処もかまわずよく鑑賞に出かけた。実際には鑑賞などという余裕のある気持ではなく、彼女は自分の裡の語るに語れない言葉の相手を芸術の醇化された状態に求めているのであつた。寄席芸人の芸の一節からでも美子は自分と言葉の通う一瞬を拾い出すことがあり、そんな時彼女は花の開いたような美しい顔になつた。

「支那の王様が龍姫の笑い顔を見たい為に烽火を上げたといひますね。姉を喜ばせようと思つたら、よい芸術と豊富な自然の中にあの人を置いてやることです。姉をほんとうに愛す人ならきつとそういう雰囲気を与えてやるでしょうが、最初の夫のSさんなんかその意味で姉をほんとうに愛していたといへませんわね」

と幹子は言つた。幹子が姉を尊敬しているのは肉身の偏つた愛情からではなかつた。幹子は姉とあい、姉と語つていと——といつても大部分自分が話しているのだけけれど